

BOOK  
REVIEW

## 異種混交が米国の力の源

『チャーリーとの旅—アメリカを探して』

ジョン・スタインベック 著 / 青山南 訳

米国は何ともみっともない国になってしまった。エゴ丸出しで、それを恥じとも思わない独裁国家の様相を呈している。4年後に大統領が代われれば、少しはましになるのだろうか。日本はお付き合いを断つことができないのだろうかから、それまでおとなしく死んだふりをしていたほうがいように思える。

あらためて米国とはどんな国なのか、米国人自身は米国をどんな風に思っているのかとの疑問から、ちょうど米国を代表する作家である著者（1902～1968）による本作の文庫版が刊行されたので、それを頼りに探ってみることにした。

といっても、本旅行記は半世紀以上も前の体験を綴ったものだ。参考になるかどうかは不明だが、米国人気質が大きく変わるわけではない。そのとおりに、米国の本質というべき面をうかがうことができる。

さて、肝心の本書だが、著者は米国全土を一周しようと決意する。動機は、自分の国でありながら、実はよく知らないことを自覚したこと。かくして直接自分の目で確かめ、その特徴・特質を探索する旅が始まる。道中頼りになる相棒は、フランス育ちの初老の紳士であり聡明な「チャーリー」と、旅の装備をふんだんに積み込んだピックアップトラックの「ロシナンテ」。

旅程は、1960年9～12月まで（スタインベックは58歳）。仕事場のニューヨークを起点に、まず北に向かい、それから西海岸に向かう。次に南下し、テキサスや最南部を経由した後、再びニューヨークへと東海岸に沿って車を進める。米国の外辺部に当たる各州をめぐる、

著者はどんなことに注目したのか。州ごとに交通表示板が違う、その文体も違う。最高速度が違う。フロンティアスピリットを体現する狩猟文化。隣国などからの渡り労働者や移民なしでは農作業は成り立たない。ことさら彼に強く感じられたのは、地方色が消えつつあることである。彼の表現を借りれば「こっちが留守にしている間に文明は大胆で大きく進んでいた」。土着の固有性が失われ、各地で都市化が進む。住まいは次第に「モービルホーム」が目立つようである。ラジオ、テレビなどの文明の利器のおかげで、さまざまな方言も聞かれなくなっている。大地に長年の労働の汗がしみ込んだ「郷土」という意識はすでに時代遅れ。町の元気が失われ、「永遠性」は誰も望んでいない。人と人とのつきあい方も変化してしまった。生身の人間とのコミュニケーションは避けられる。そのせいもあるのか、政治的発言には消極的だ。

しかし、著者は彼自身が抱いていた米国像の喪失に驚き、悲しくは感じるが、嘆いたり、懐古主義に陥ったりするわけではない、また文明批評家のごとく辛辣な意見を吐くわけでもない。彼が書き表したものと、あるがままの米国を描き

出すこと。米国の現在を見たまに語り、米国の現実を克明に綴る。

その中でとりわけ印象深かったのは、著者が「特別なところ」と称したテキサスと最南部の観察記である。彼は、黒人差別を告言してはばからない「チアリーダーズ」の運動の場に直接居合わせる。根強く厳然と残る人種差別。当地に住む白人や黒人との対話が痛ましい。

著者が最終的に行き着く米国観は、異種混交の国だということだ。彼は、ヨーロッパの、アジアのどこの国であれ、そして黒人もまた、米国に住む子孫は「本質的なところで米国人」であると言う。人種の垣根を越えればそれまでだが、著者が導き出したこうした雑種性格こそ米国を米国足らしめる最大の特性であるに違いない。それが意味するのは、互いに違うということ、換言すれば相互のせめぎあいこそが米国の力の源であるということに違いない。

しかし、米国に精通した人にはこうした米国観はしばしば耳にすることであり、とりたてて目新しいものではないだろう。それはともかく、米国の全土をくまなく巡った人は、多くはないはずだ。米国は広い。ハイウェイが張り巡らされているとはいえ、著者自身いくら地図を頼りにしても、何度も道に迷っている。目次に続いて載せられているのは、米国各州の位置と彼の旅のルート、立ち寄った都市や町の地図である。知らない土地が出てくるたびにそれを頼りに確かめていた。米国にまさか広大な砂漠があるなんて、意外な発見。あなたが知らない興味津々の地名や風土などにきつと出会うはず。

関本 英太郎  
見出し MB 31  
(以下同)

## 十字路にはない妖艶さを満喫

『Y字路はなぜ生まれるのか?』

重永瞬 著

Y字路について愛好家が語り尽くす本である。本欄ではこれまで、ちょっと変わったマニアが蒐集したコレクションをまとめた本を紹介してきた。醤油鯛、家庭菜、階段、石ころ、給水塔、片手袋などである。また、散歩しながらの路上観察についても取り上げてきた。番地、地下街、園芸、飛地、絶景、商店街などである。Y字路はその両者にまたがり、書評子の好みにぴったりの一冊である。書店で見つけたときは小躍りし、期待どおり面白くてあっという間に読んだ。ところが本欄より先に、朝日新聞の1面コラム「天声人語」で取り上げられてしまった。ちょっと悔しかったが、書評子の趣味がそれほど偏ってはいないようで、安心もした。

どんなことでも学問を始めるには、まずは定義を整理して、関連用語を定めなければならない。例えば、限りなくT字に近かったり、X字の場合の取り扱いをはっきりさせておく。また、Y字路を愛でる視点として、横から見る路上の目と、上から見る地図の目があることを指摘する。そして本論に進む。Y字路だと三角地が生まれるわけで、そのとんがった正面の見た目や、使いにくい地面の活用法について論考する。鋭角の頂点には何か設置されていることもあり、これも重要な鑑賞対象となる。ポストや自販機もあれば「いけず石」もある。これは家屋に車をぶつけられないように道に置いた邪魔な石のことで、「いけず」とは「意地悪」の関西弁である。いよいよ、Y字路が生まれた原因について分類し、真面目に考察する。多くの交差点は、直角の十字路もしくはT字路である。好んで



Y字にすることはなく、そうせざるを得なかった理由がある。どの章も、ウケ狙いでふざけたりせず、真剣に分析しているのが愉快でたまらない。著者お気に入りのY字路のカラー写真も多数あり、どこも味があり、匂いまで漂ってきそうである。それはきっと、人や車を通す道にすぎないはずのY字路が、そこを往来する人々の暮らしを色濃く反映しているからだろう。猫も似合う。

Y字路多発地域もいくつか紹介される。あっちにもこっちにも現れるY字路に、著者は興奮を抑えながら街の歴史を探る。発生する原因が判れば、多発するのも理解できる。愛情いっぱい語る著者によると、街は生き物で、長い時間と広がり、織りなす物語が連なっているらしい。まったく同感である。そんな街を知れば、愛も芽生えるというものである。

実在しないY字路についても放っておかない。歌に歌われることもある。多くは人生の岐路の象徴として登場する。漫画やアニメや絵にもなる。事件も多い。著者はもう、Y字路に関することは何でも気になるらしい。その情熱が手に取るように伝わる。

広場や教会を中心に街が放射線状に広

がった欧州には、Y字路が多いのかもしれない。海外のY字路も、国ごとに違ったり、共通だったりして、きっと興味深いだろう。ところが本書が扱うのは、主に国内のY字路である。海外については、地図がいくつか取り上げられるだけで、現場は訪れていない。もしかして著者は、一生懸命自制しているのだろうか。海外まで足を伸ばし始めるとキリがないので。

これを読めば、もう誰もがY字路マニアになること間違いなし。いつも通り過ぎるあそこも、もう素通りはできない。写真に収め、本書87ページにあるY字路調査票に記入しておこう。分岐の角度を測り、角に置かれた物に手を添え、三角地の活用を確かめ、なぜY字になったのか原因を突き止め、これからの見通しを考えよう。著者には、面白いY字路と、そうでないY字路があるらしい。これは個人の好みなので、別に一般化することでもない。われわれ読者にも、自分なりの好き嫌いがあっていい。高速道路の出入口のY字路を、無機質でつまらないと思わない者がいてもいい。書評子は、Y字路に建つ民家の角部屋にも興味がある。あの鋭角に挟まれた空間がどのように活用されているのか、見てみたい。仏壇やTVを置くのにちょうどよさそうである。床の間にして花を生けるのも悪くない。おいたして叱られた猫が、暗い隅に向かって反省するのにもいい。

水谷 光  
(市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室)  
10a 新31  
227



# BOOK REVIEW

活用

## There's a sunny side to every situation (42nd Street)

『亡くなった人が教えてくれること』—残された人は、いかにして生きるべきか—

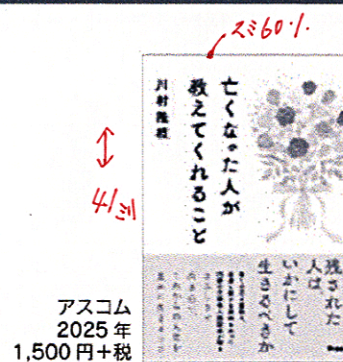
川村 隆枝 著

著者は書評子とほぼ同じ世代の麻酔科医で、生まれ年というなら2年先輩である。ということは麻酔科医の数が今よりもはるかに少なく指導医数も1000人に満たない時代にトレーニングを受けた世代である。なにしろ麻酔科専門医を目指す人が少ない時代であるから、仕事で一緒にしたことはないが、私的には勝手ながら“同志”感を覚えるところである。

チオペンタール（もしくはチアミラル）、サクシニルコリン、ハロタン、亜酸化窒素（笑気）、クラレーが全身麻酔の主要薬物であった時代であり、またパルスオキシメータはない時代であり、語りたい話はたくさんあるが、その頃からはもう半世紀ほどが経過し、麻酔のプラクティスも大きく変化した。

著者は長年、仙台医療センターの麻酔科部長として活躍し、とりわけ心臓麻酔の分野で大きな貢献をしてきたが、第一線を退いた現在は介護老人施設の施設長を務めている。そして、そこでの日々を中心として、心に浮かぶよしなしごとを徒然なるままに書き綴ったものが本書である。著者の執筆活動については、ご存じの方も多いだろうが、本書以外にも『手術室には守護神がいる—心配ご無用』（2012年）、『「夫の介護」が教えてくれたこと』（2018年）、『70歳の新人施設長が見た 介護施設で本当にあったとても素敵な話』（2020年）などがあり、なかでも「手術室には守護神がいる」は神山 征二郎 監督、鈴木 京香 主演で映画化もされているのだから、肩書には医師だけでなく「作家（随筆家）」を加えても罰は当たらないだろう。

『「夫の介護」が教えてくれたこと』はご夫君が脳出血で倒れて以降の日々の記録であるが、その7年後に上梓された



アスコム  
2025年  
1,500円+税

本書では、ご夫君だけでなく、ご両親も他界し、さらに（人ではないけど）愛犬も失ったことが書かれている。短期間の立て続けの重大事件であり、精神的にはかなりの苦しい日々を過ごしてきただろうと思われるのだが、筆致はあくまで静かであり、穏やかである。SNSなどでよく目にする感情過多な絶叫調、悲憤慷慨の煽り調の文章とはまったく質が異なるのである。つまるところ、文章は人柄を反映するものであり、よく言われる言葉を引用するなら「深い川は静かに流れる」のである。当然ながら、介護老人施設でも入居者が亡くなることはよくあるだろうし、身内でないとはいえ、身近に接している人を見送ることが少なからずあることもまたそれなりの感情をもたらすに違いないが、決して悲劇的にはとらえていない。本書の帯の言葉を借りるなら、「さみしさと向き合い、これからの人生を豊かに生きるコツ」を彼・彼女らから教わっている心境なのである。

書評子は2020年の第32回日本老年麻酔学会で、シンポジストとして老年麻酔科医の活動について話したことがある。高齢になっても老害といわれず、「円熟」といった高評価を受ける仕事は断家かオーケストラの指揮者くらいであって、医師とくに急性期医療を担う医師たちは、

スポーツ選手同様に、然るべき時点で退く必要がある。発表に際して調べたところでは、米国麻酔科医の引退平均年齢は63.3歳で、その後も仕事を続けている者でも、40%はパートタイムであった。

身体的、精神的に負担の大きな第一線の現役を退いても、それまでに獲得した高い経験値や広い視野、洗練された無駄のない技術を用いて、体力的に可能な範囲で麻酔の仕事を続けるのもいいし、医療に関連する領域として病院管理や教育という仕事に転じるのもいい。また執筆とか、今ならYouTubeなどのメディアを用いて自らの意見を公開する機会を作り出すのもいいだろう。あるいは、そうしたしがらみをすっぱりと切り捨てて、自分の時間は自分のために（あるいは特別な一人のために？—“My Life Belongs To You”という歌もあったな）使うのも、結構なことだと思う。

本誌の読者のほとんどは現役バリバリの医師であろうが、いずれ引退する日はやってくるし、それは今考えているよりもはるかに近いところにある。パスツールが言うように、幸運はよく準備された心の中にのみ宿るものだとするなら、日々の忙しにかまけて無為無策に過ごすのではなく、自分の人生とりわけ第一線を退いた後に長く続く日々を、どのように作り上げるかを考え、試行錯誤にはなるだろうが、デザインするのは大切なことである。本書には、そうした自分の人生を考えるためのヒントがそこかしこに散りばめられている。個々のエピソードは短く読みやすいので、ちょっとした空いた時間でいいから読んでみて、いかに生きるべきかを考えるのは、決して無駄なことではない。

福家 伸夫  
(帝京大学ちば総合医療センター)